

海外論文の紹介

「ドイツ環境医学誌」

(臨床環境 9 : 28~29, 2000)

(Zeitung für Umweltmedizin Heft 7/1999)

患者とともに問題点を探る

Heinz A. Guth

社団法人 連邦化学物質過敏症

一部のドイツ医学部教授達は IPCS (International Programme on Chemical Safety) ワークショップ (1996年ベルリン) の報告書をまたも繰り返して WHO (世界保健機構) で決定された政策として偽って引用している。WHO は次のように論文で回答をしている。「……この報告は世界保健機構の決定、または政策を必ずしも表しているものではない」。ワークショップ報告書の表紙にも次のように記されている。「本報告書は国際的な科学者の1つのグループの意見を示したものであり、国際連合、国際労働機構、あるいは世界保健機構の環境プログラムの決定、あるいは原則を反映したものでは一切ない」。さらに「本報告書は正式発表を意味するものではない」とも述べている。

化学会社側の専門家に依存して作製されたこのワークショップの報告書に述べられているとしても、WHO の主張するところは、この問題が精神的病因 (化学物質に対する恐怖症、心身症による障害、または妄想) からとは考えていないとすることを強調している。さらに、この報告書は、「この疾患 (化学物質過敏症) の病因は医学的に議論され、発症の病理機構に種々な仮説を提出し、そして更なる研究が求められている」と記している。

ある毒物研究所の見解は以下の通りである。ある種の揮発性芳香族化合物では「目や上部気道での粘膜刺激作用以外にも、嗅覚、味覚領域の精神運動性および感覚系の障害を伴う神経毒物作用が明らかに前面に出ている。そしてこの神経毒作用は塗装業者やラッカースプレー使用者の領域でも十分知られている。これらの職域では、精神運動障害が種々な愁訴の発端として現れている。この症状は適当な予防策や回避策が取られれば、可逆的である。しかし、持続性に作用を受け続けると、症状は不可逆性の障害となり、末梢神経障害 (多発性神経炎) や肝臓、腎臓、心臓、皮膚、そして精巣で障害を引き起こす」。

中枢神経系の障害はポジトロン断層撮影 (PET) により明らかに証明される。この際、細胞の機能異常ではなく、構造変化が証明されることもある。その様な例ではその変化は不可逆的と考えられ、これは患者の機能不全となる確実な所見である。

化学物質過敏症は米国ではかなり理想的に進んでいる。政治面でも化学物質過敏症の認可が得られるべく努力されており、間もなく認可が得られるであろう。なお米国では化学物質過敏症という概念は環境医学疾患群の総称として扱われており、狭義の化学物質過敏症の概念とは異なっている。

患者の代理人として、我々には地道な科学的作業が要求されている。すなわち入念な文献調査、国際的な医学的・科学的研究結果の追跡、研究および実地における先進技術の応用、そして実状を知っている患者利益の代弁者からの聞き取りも求められる。一方これまでのドイツ連邦政府は、化学物質過敏症/慢性疲労症候群を、患者個々の重症な障害として認知することに疑問を持ってきた。またドイツ連邦医師会も同様に化学物質過敏症の患者を不当にまとめて精神的疾患として考えているのは誠に残念である。

著 者 連絡先

Zeitschrift für Umweltmedizin
Promedico Verlag GmbH
Postfach 67 03 06
22343 Hamburg

翻訳者 石川 哲・宮田 幹夫

(北里研究所病院臨床環境医学センター)

訳者注

日本では、役所関係の会議でしばしば登場する1996年ベルリンで開催された国際化学物質安全性計画会議からの正式の報告書として、米国で言われている化学物質過敏症の概念が不適當であり、**Idiopathic Environmental Intolerance** (本態性環境不寛容状態) と呼称すべきとの意見が出されている。しかし残念ながら、この会議の構成員の人選、またそれに対する WHO の正式な態度が日本には全く伝わらないままに、あたかも WHO の正式決定かのようにこの本態性環境不寛容状態の名称と、それに対する限られた、主に一部企業と関係する化学学者と御用学者の意見が一人歩きしている。情報の人手が少なく、ドイツ語をあまり読まない日本人では止むをえないかも知れないが、欧州識者の間ではこの会議の性格が以前から問題視され、フランスではこの名称は問題にされていない。過去の環境庁の報告でも、IPCS があたかもドイツと USA の意見を代表するかのよう、この2頁の論文が登場したことがある。今回ドイツ環境医学誌にその問題点が掲載されたので、ここに読者の誤解を正すために訳出した。